

・ ・ その 104 初めにもどり

合氣道を心の不安を鎮めたい（不動心を得たい）という思いで始めました。その出会いが藤平光一先生の「氣の威力」でした。合氣道を稽古するうちに、合氣道の氣とはどこから来るのか？一体何故そのような不思議な力が働くのか？を理解したいために行き着いたのが「古事記と言霊」島田正路氏著「ひふみ神示」岡本天明著の二冊の本です。

今思い返しますと

「ひふみ神示」岡本天明氏著 幸せに生きる方法を教えてくれる本です。

「古事記と言霊」島田正路氏著は 命とは？の本質と精神宇宙の真理を教えてくれるとんでもない希有な本です。

「古事記と言霊」理解は簡単ではない本を初めにもどり整理してみます。

「ひふみ神示」は言霊が分かると理解が深まります。この本も理解が簡単ではないです。私自身も理解がその途中ではありますが今の私の心境に従い記していきます

島田正路氏著の「古事記と言霊」より

近代科学は物質の構造や色々の仕組みを発見してきました。私達人間の対象として現われる世界を科学は詳細に研究し、物質とは何であるか、の完全な答えを出す日は間近いことでしょう。

この科学の研究とは逆に、それら外界の事物を見、研究観察し、考えている自分の心とは何なのだろうか。心はどんな構造を持っていて、どのような活動をしているのか、数千年前の大昔、私達日本人の祖先は考えたのでした。そして長い年月の研究の末、「心とはなにか」の問題に完全な解答を発見したのでした。その答えは・・・

（心とは言葉を運ぶ船である。その内容が以下に続きます）

人間の心は五十個の要素から成っています。その内訳は心の先天要素（現象として現われる以前の心の活動の要素）十七個、後天要素（現象として現われた最初の最小の要素）三十三個合計五十個の要素です。私達の祖先はその五十個の要素に、現在私達が使っているアイウエオ五十音の清音の単音をそれぞれ当てはめて、そのひとつひとつを言霊と呼びました。また^ひと^まと^まとも呼びました。言霊とは言葉の最小単位であると同時に心の最小要素でもあるもの、心であると同時に言葉であり、言葉であって心であるもの、すなわち言霊であります。

・ ・ その 105 に続く

初めにもどり

その 105

合氣道で心を下肚に鎮めないと氣が出てこないと教わりました。植芝翁先生は「鎮魂帰神」といいました。

氣が出ているかどうかは手を前に出して貰います。それを別な人が肘関節が曲がる方向に力で曲げます。曲げる人の力が強ければ曲がります。この事実が当たり前だと思っていました。ところが氣が流れている手は力の弱い人でも簡単に曲がりません。氣の出し方が上手な人はどんなに力の強い人でも曲げることは出来ません。このことを藤平先生は折れない手と表現しました。合氣道を習い始めて最初に行ったのがこの腕を曲げることです。

氣が出ているかどうかを判定するのに使いました。

心を下肚に鎮め続けて自分の身体を下肚の中心より一つにして動かすことが出来るようになると技が少しづつ出来るようになります。不思議な力が使えるようになります。でも何故そうなるか分かりません。また氣とはの定義がよく判りませんでした。そのころ心そのものも一体何かがよく判りません。氣は流れていると思ったら流れているのだよと教わっています。なんと???でした。???が今思えば言霊のことでした。でも不思議な力の虜になり稽古していました。

では氣の出る心の状態、この「鎮魂帰神」の状態は合氣道では自分の眼の前の広がった意識を無限に下肚に縮小して行きなさいそしてその意識の動きを止めない事と教えられていました。今思えば何も考えていない生まれたままの赤子の心 真新な心 言霊工にもどりなさいと言うことだと思っています。

島田正路氏は遊魂の項で説明されています。

遊魂について

私達は心配事があるときなど床についてもなかなか寝付かれないことが良くあります。その時はあらぬ取り留めもない考えが次から次へと頭をよぎって行きます。「こんなこと考えたって解決には何の役にも立ちもしないのだから、もう考えるのは止めよう」と何度となく心に言い聞かすのですが、いつの間にかまたその取り留めもないことを考えてしまっています。そうして眠れない夜となります。

このような迷いはどうして起こるのでしょうか。迷いという文字は八十八の道と書きます。色々な道が考えられて、さてどの道を行ったら良いか迷うことです。考えられる色々な道とはすべてその時までには経験した事、人から聞いたこと、本で読んだりテレビで見たりして得られた方法です。一長一短と思われるそれらの道がお互いに葛藤を起こして、頭の中をぐるぐると駆け巡り、どの道をとったら良いか、それが迷いです。

そんなとき、迷いに迷ったあげく「下手な考え休むに似たり。その場になればなんとか良き考えが出るだろう」と頭の中をご破算にしてしまうと、結構良い方法が思い浮かぶものなのです。この色々な考えをご破算にすること、数学で言うと零に戻ること、良い考え（適切な事物の処理方法）を取り入れる必須の条件です。このことを言霊で説明してみましよう。

ああでもない、こうでもない、と考えあぐむ事は色々な経験知のぶつかり合いであって、言霊学で言えばオの次元内の出来事です。頭の中でこれら経験知の葛藤に疲れて「出たとこ勝負より仕方がない」と頭の中で葛藤をご破算します。考えることを止めます。ということは考え出した以前に変えることです。それは色々な考えが出てくる大元の宇宙、言霊でいえば言霊アに帰ることになります。この広々とした自由な宇宙に心が抱かれているのに気がつきません、人間の主体性が回復し、

それまでの葛藤を繰り返していた経験知を自由に選択・按配して実行に一步踏み出す事が出来る実践智というものが働き出してくれます。言霊工からの活動です。

以上のような「迷いから一転して実行」の課程は、この世の中に生きて行く上で良く経験することとって良いでしょう。

ところが世の中の大方の人々が以上述べた心の果てしない泥沼の葛藤を一生の間続けて、しかもそれをご破算にすることを知らずに過ごしたとしたら、考えただけでぞっとする恐ろしい事ではないでしょうか。そしてその恐ろしいことがそのまま現実であり、そこから抜け出せることが出来ない世界、それがこの世の中なのです。

人は一人前になり世の中に生きて色々な経験を積み、信念を持ち自信を深めていきます。信念はともすると他の信念とぶつかる時があります。心の中に、そして他人の信念との間に戦いが起こります。この時衝突した自分の信念や経験を心の中でご破算にし、零点に帰ることがない時、人は泥沼に足を取られ、次第に深みにはまっていきます。仏教はこの世を八苦の娑婆と呼びます。迷いから目を覚まし創造に転換する英知が湧き出てこない世の中なのです。そのあげく、個人の人生の挫折や大にしては国家・世界・人類の破滅さえ招来しかねないのが現代の世相です。

このご破算にすることを知らず一生の間続く心の葛藤は何に原因しているのか、それが遊魂のなせる技なのです。

遊魂とは文字通り遊びにでて家に帰ることを忘れてしまっている魂です。ですから遊魂は自分が家から飛び出していることすら知りません。

昔からよく憑依霊だとか、狐憑き・霊に取り憑かれた、とか云う言葉をよく耳にします。人間の心に何か人間とは違う霊が取り憑く、と言う意味でしょう。けれどこのような言葉は正確ではありません。人間の魂が何かの誘惑に乗って遊びに出て行って帰ってこないのです。この魂を遊魂と呼びます。しかも人はその遊びに行った魂を自分自身だと思い込んでいるのです。

霊が憑く、などと言うと、誘惑するのは動物の霊だと思いがちですが、そうではありません。先鋭的なマルキニストなどはマルクス理論の中にドップリ浸ってそこを住み家としてしまっています。遊魂の遊び先きはその他、あらゆる経験知、観念、信仰、理論から煙草、酒、美食、贅沢、ギャンブルその他多種多様限りが有りません。

人間が理論を述べること、酒を飲むこと、美食をすることと・・・決して悪いことではありません。けれど理論が人となり、酒が人を呑み、美食に溺れてしまっは、万物の霊長たる資格を放棄してしまうことになりまねません。

自分が遊びに出たまま帰ることを忘れていることに気付き、生まれたままの真新な自由な魂の赤子に帰ること、神道ではこれを鎮魂帰神と呼びます。他人の理論や習慣、ギャンブル、酒にのぼせ上がっている魂を鎮めて本来の神の子としての自主性に帰る、と言うことです。大方の人は自分が遊びに出たまま帰ることを忘れ、自分の魂の住み家・故郷を意識出来なくなっていることに気付かな

いでいます。

遊魂から言霊の原理を考えても、分ったようで分りません。何故なら言霊とは自らの魂の元の住み家の内容なのですから。魂の故郷に帰ってみれば、五十音の言霊は自らの生命の中に生き生きと活動していることを知ります。心の故郷・住み家に帰る、とはどこか未知の世界に帰ることではありません。生まれる前から存在し、生まれるとそこに産み落とされ、そして今が今まで絶えずにその中に息づいている意識に帰すだけの話しです。

経験を積み、知識を増やしていくのは進歩の学問です。魂の故郷に帰る道は退歩の学と呼ばれます。そこは創造の叡智（言霊工）が無限に湧き出てくる生命の泉があります。

・・・106に続く

初めにもどり

その 106

その 105 で紹介した折れない手という方法で氣が出ているかどうかは身体をテストすることで確認できます。

氣とは何か分らなくても氣を使うことが出来ます。氣とは何ですか？二十数年間合氣道の稽古で後輩に聞かれるたび「無限に小さいものの無限の集まり」と答えて、自分自身なんとなく分かるような分からないもの、どこかもやもやが残っていました。 それこそ概念の説明で実相から遠く離れていくのでこんな状態になります。

「ひふみ神示」に次のような文章があります。

「キつけてくれよ。キがもとざぞ、キから生まれるのざぞ。心くばれと申してあろが、心のもととはキざぞ、すべてのもととはキであるぞ、キは⊙（よろこび）ざぞ、臣民みなにそれぞれのキ植えつけてあるのざぞ、うれしキはうれしキこと生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを生むぞ、喜ばばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのざぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるのざぞ、おそれるとおそろしいことになるのざぞ、ものはキから生まれるのざ、キがもとぞ、くどくキつけておくぞ」

これもキのことについての記述ですが、分かるような氣がするのですがまだピンときません。カタカナのキで漢字の氣ではありません。何が違うのでしょうか？ キはよろこびと言っている???確かに合氣道でプラスを思えば強くなりマイナスを思えば弱くなることは体験出来るし、氣が出ていないときは注意の意味でよく師範から聞かされたものです。

今なら答えることが出来ます。キとは全精神宇宙の五つのバイブレーションでアイウエオの母音のことです。暗闇の中にあってそれ自体は全く動きがありません。それが何故流れとなって現れて来るか、「古事記と言霊」島田正路氏著書で言っています。人間が生まれ出たときにそれと同時に頭の中で働く火花の様な創造知性と呼ばれるものが8つ廻りはじめます。この創造知性はチキヒシミリイニという8つの父韻を表します。母音と父韻が掛合わさってアイウエオ五十音が出来上

がります。言霊布斗麻邇と呼ばれています。

この父韻は世界中の人間の中に同じものが入っています。なので同じ音に聞こえ同じ色に見えます。この世は無色無音の世界です。バイブレーションを耳や目が捉えて音や色に変わる世界です。

母音と父韻が掛合わさって出来た言葉を使って我々は物や事に名前を付けます。その名前を連想ゲームのようにつなげて思いを巡らすことで初めて意識が芽生えます。言霊ウが現れ出ます。

人間の自我意識の始まりです。

この言霊ウの意識は言葉を浮かべて話すことが出来ますこの時発生するバイブレーションがキを氣の流れに変えてこの現れ出た世界で氣の動きを創り出します。ですから言葉そのものが氣の流れを起こすと理解できます。

そうするとひふみ神示の内容もはっきり分かってきます。(その 11 参照下さい)

古事記は歴史書ではなく、言霊の教科書であると「古事記と言霊」島田正路氏著書に書き記してあります。

・ ・ その 107 に続く

初めにもどり

その 107

氣とは言霊（言葉）と言うことが分かりました。ではプラスの氣とマイナスの氣とはどういうことでしょうか。その 1～その 5 を参照下さい。プラスは自分から出ていく氣の流れ（伊耶那岐の神） マイナスは自分に流れ込んでくる氣の流れ、全ての言葉はこの 2 つのグループに分けられます。 光りに向かう＝プラスの氣

反対に影に向かう＝マイナスの氣 と云うことができます。

言霊ウまでの成り立ちを古事記では次のように説明しています。

島田正路氏著「古事記と言霊」より

古事記の上巻は次の文章で始まります。文章を区切って順を追って説明していきましょう。

あめつち はじめ たかま はら あま みなかぬし かみ たかみ むすび かみ
 天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産巢日の神。

か み す び かみ ひとりかみ
 次に神産巢日の神。この三柱の神は独神に成りまして身を隠したまひき。

あめつち はじめ 天地の初発の時

古事記だけでなく古代のほとんどは、最初の文章がこの「天地の初発」の事から書き出されています。例えばキリスト教の旧約聖書の最初の文章は「元始に神天地を創造たまへり」です。

「天地のはじめ」の天地とは何を指して言うのでしょうか。「そんな事は言うまでもなく、我々の眼

前に広がっている大きな宇宙、その中にある星雲や銀河系や太陽・地球といった天体のことを言っているのだ」と大方の人は思われるでしょう。果たしてすぐにそう断定してよいものなのか、もう少し考えて見ることにしましょう。

眼を開いて大空を見上げたとしみましょう。そこには無限に広い宇宙が広がっています。夜ともなればそこには無数の星が瞬いているのが見えることでしょう。この眼に見える宇宙、天地のはじめと言えば、当然に幾百億年か知れない大昔、宇宙物理学が主張するように、混沌とした宇宙の内部が活動を始めて次から次へと天体が生成出現したときを指していることとなります。

このように考えるのが現代の常識とすることが出来ましようが、それならそう考えることしか解釈しようがないのか、といいますと、そうとも言い切れないことに気付くのです。

先に眼を開いて大空を仰ぎました。今度は眼を閉じて静かに坐ってみましょう。初めの内はつい先ほどまで仰いでいた大空の記憶の余韻が続きます。空は青かった。木々は緑さわやかだった、と言う記憶です。その内に「そろそろお腹がすいてきたな」とか、「午後に会う約束のA氏とはどんな人なのかな」等々、様々な思いが心をよぎります。このように色々な思いが現われては消え、消えては現われる心、その心の広がりを中心の宇宙と呼ぶことが出来ます。

眼を開けてみた外の世界が果てしなく無限であるように、内に振り返った心の宇宙も果てしない広がりを持っています。人間にとって大空や太陽。地球・大地など外の世界は厳然と存在しているものでありますが、色々な思い、感じが出て来る心の世界も否定し去ることの出来ないものであることも確かなのです。

そして古事記を始め世界の各宗教書の最初に掲げている「天地のはじめ」の天地とは外に見える太陽や地球のある宇宙のことではなく、正にこの心の宇宙のことを指して言っているのです。このことをはっきり心に留めませんと、古事記や世界の神話や各宗教の内容がとほうもなく間違った方向に解釈されてしまいます。

・ ・ その 108 に続く

初めにもどり

その 108 島田正路氏著「古事記と言霊」より

現代は科学の時代です。現代人は物事を自分の外、向こう側に置いて考えることが得意です。それとは逆に古代は精神の時代でした。物事を見たり、聞いたりしている自分自身の心の内容に重きを置く時代でありました。

そして古代には物事を表現するために哲学的概念の言葉がありませんでした。ですから心の中の出来事を表現するのに、眼に見える外界の事物を借りて表現したのです。

例えば心の中に起る出来事の全て、という事を表現するのに外界に見える全部、即ち天と地、天地という言葉を使ったのです。古事記のはじめの言葉「天地」とは人間の心の中に現われ出てくるもの全部と言った意味なのであります。

「天地」が心の中に現われ出てくるもの全部と言う事であるなら「天地のはじめ」とは何を指すのでしょうか。心に現われ出てくるもの、といえは眼や耳・鼻・舌・身体などの感覚、好奇心やアイデ

ア、感情、命令・・・等々いろいろあります。それらのものの「はじめ」といえば、それらが心の内に現れようとする瞬間のこと、と書いていいでしょう。心の内に何かが現れようとする瞬間のこと、と書いていいでしょう。心の内に何かが現われようとする兆しの瞬間、それが物事の「はじめ」です。

そして心の中に一つの思いの芽が兆しはじめ、それが発展して具体的な一つの思いとして心の内に現われ、言葉として表現され、発音され、その声が人の耳によって聞かれ、了解されていく、という一連の出来事の成り立ちや活動の内容が明らかにされるとしたら、それが取りも直さず私達人間の心の構造と活動の様式を解明することになる、と言うことが出来ましょう。古事記の上巻である神話は神様のおとぎ話でも民話でもなく、永遠に変わる事のない私達人間の心とは何か、を説明しているのです。

・ ・ その 109 に続く

初めにもどり

その 109 島田正路氏著「古事記と言霊」より

たかま はら 高天の原に

「天地の初発の時」が天体や大地がこの宇宙の中に形成された大昔と言うことではなく、心の中に色々な現象が現われようとする瞬間の時と言うことが了解されました。ですからそれに続く「高天の原に」とは宇宙の中の何処かの場所と言うことではなく、ここでは単に「心の世界」という程の意味にとる事が適当でありましょう。何か起ろうとしてまだ何も起っていない真新まっさらな心の宇宙のこととあります。一つの塵もない透明な広い広い心の世界のことです。仏教ではこれを法界と呼び、禅では「空」と名付けました。

この高天の原という言葉は古事記の文章の中にたびたび出てくるのですが、その使われる時と場所によって意味内容に相違があります。その都度説明することにいたしますが、今は代表的なもう三つについてお話ししておきましょう。

「天地のはじめ」の次の高天の原は何の出来事も起っていない清浄無垢な心の世界のことです。その何もない心の内に活動が起り、思いが具体化して言葉となり、その結果として心の全構造が人間によって完全に認識・自覚されます。

この認識された理路整然たる心の世界、これを高天の原と呼びます。さらにもう一つの高天の原とは、心の構造をはっきりと自らの心の内に理解した人が集まり、その原理に基づいて文明創造し、人々を教化する政治の場のことを指して言う場合です。このような政庁を昔は百敷の大宮とも呼びました。

高天の原という言葉についてもう一つの話しを付け加えておきましょう。高天の原という名の由来です。この本の話が進行して人間の心とはどんな構造をしているのか、が次第に明らかにされ、

結論として理想的創造精神が五十音の言霊の図として把握されることとなります。この図表を天津太祝詞音図というのですが、その音図の上段の十音が向かって右からアタカマハラナヤサワと並びます。(その37を参照ください) その十音の中の棒線を引いた部分の五字タカマハラ(高天原)を取って名付けたものです。でありますから高天の原は正しくはタカアマハラ、またはタカマハラと呼ぶのが適当と言えます。

その110に続く

初めにもどり

その110 島田正路氏著「古事記と言霊」より

成りませる神の名は

何事も起っていなかった高天原という心の宇宙に、ある時、ある処で何か起ろうとする気配が始まります。心の中に一つの思いや考えが起ろうとしてきます。心の活動の始まりです。

普通私達は何かを思い、感じた時、それが心の活動の始まりだと思っています。「喉が渴いたな」と思うのが始めて、次に「お茶が欲しい」と続く、と思っています。けれど自分の心の内をよくよく考えてみますと、「喉が・・・」と頭で具体的な言葉として思う前に、頭脳の中で複雑経緯があることが分かります。物事を(それがどんな簡単な出来事であっても)それを思い、感じる以前に、頭の中では目まぐるしい動きがあつて、その後「ああ、喉が渴いた」という具体的な感じが出てくるのです。

具体的に「喉が渴いたな」と感じた時はすでに心の出来事です。その出来事が起る以前の心の働き、まだ形として現われない働きを心の先天活動と呼びます。経験する以前ということで先験活動とも言われます。それに対し具体的に思い、感じた事を後天活動と呼んでいます。そして今お話をしています「天地のはじめの時」というのは、出来事として分かる以前の心の先天活動について言っているのです。

さて頭の中の思いの兆が動き始めました。勿論具体的な思いになる以前の動きですから、人はそれを何だと表現するまでに到っていません。けれど何かが成立し始めようとしています。その成立し始めようとするを、古事記は「成りませる」と表現しました。また具体的出来事として起った時は言葉として成立しますから、言葉である音が「鳴る」という字を当てて考えることも出来ます。くどくどお話しするようですが、人間の思いが始めて働き始める瞬間の様相は以上のように考えられるのです。

何も無い広い心の宇宙に何かが動き始めました。それはどんなことなのでしょう。話は次に移ります。

・・・その111に続く

初めにもどり

その111 島田正路氏著「古事記と言霊」より

あま みなかぬし かみ
天の御中主の神

言霊ウ： 心の内に具体的な事柄として言葉で表現される以前の、意識されない頭脳内の先天の構造の中のお話しであることを心に留めてお聞き下さい。何もない広い心の宇宙の中に何かが動き出します。何か分からないけど広い宇宙の一点に動き出したもの、そしてやがては「私」という意識に発展して行く最も原始的な意識の姿です。

宇宙の中に初めて意識が動き出す一点、それはよくよく考えて見ますと、その動き出す瞬間が今であり、此所である、ということです。心の息吹が芽を吹き萌え出ようとする瞬間こそ現実の今であり、此所であると言うことが出来るでしょう。これ以外に今という時と此所という処はありません。私達の心の活動はいつでもこの今・此所から出発しています。

人間万事全ての活動が始まる出発点です。古事記の編纂者太安万侶はこの人間の原始的な意識に天の御中主の神という神名をあてて表現したのです。その実体を言霊学問で言霊ウと言います。

何故太安万侶は今・此所に始まる意識の元の姿に天の御中主の神という名前を当てたのでしょうか。天の御中主の神の「天の」は心の宇宙の、と言う意味です。「御中主」とはその宇宙の中心にあって、全ての意識活動の元（主人公）としての、の意味。神はそういう実体のこと。広い宇宙に、ある時ある処で、やがて発展して私という自覚となる原始的な意識が芽生えます。その意識がどんな小さい、ささやかなものであっても、無限大の大宇宙がその今・此所で一点から活動を開始するのですから、その瞬間の一点こそ宇宙の中心と言うことが出来ます。そしてその一点がやがて「我あり」の自覚に発展して行くのですから、宇宙の主人公というわけです。私達日本人の祖先はこの一点の自覚体に言霊ウ、と名付けたのです。そして太安万侶は古事記神代巻編纂に当たって言霊ウを指し示す「指月の指」としての天の御中主の神という神名を使ったのです。

「注1」 心の宇宙の中に活動が始まる一点、今・此所を古代の日本人は「中今」と名付けた（続日本書紀）。誠に当を得た言葉と言える。

「注2」 宇宙が活動を起こし、中心の一点が動き出し（言霊ウ）、次々と活動が進展して、一つの出来事（現象）となって現われる、その活動を「宇宙剖判^{うちゅうぼうばん}」と呼びます。剖は分かる。判は分かる。剖れていく活動が人間に理解されて言葉として分かる、と言うことである。分ける、から分かる、日本語の言葉はこのように巧みに出来ている。

「注3」 心の最初の活動について古事記は「成りませる神・・・」と表現した。これは心の構造を明らかにする事を目的とした書き方である。同じ事を表現するのに聖書創世記な「神、天地を創造りたまへり」と記している。神を本意とした書き方である。聖書が古事記と違い、人間の信仰の書として書かれたからである。

古事記と言霊との関係はまだ始まったばかりです。けれどこの両者の関係について賢明な読者はもうお分かりになられているかと思います。古事記が編纂される以前から人間の心の前章を解明した言霊の原理なるものがすでに日本人の所産として世の中に用入れられており、その原理がある理由から呪示・比喩の形式で書き表わされることになったのが太安万侶による古事記神代の巻

きであるということです。言霊の原理が先ず有り、その後謎々として古事記が作られたというわけです。今後古事記と言霊との関係が明らかになるにつれて、読者はこの事実を確認することとなります。

・ ・ その112に続く

初めにもどり

その112 島田正路氏著「古事記と言霊」より

心の宇宙の中に活動の第一歩が始まりました。天の御中主の神・言霊ウの誕生です。これを図で表現しますと下ようになります。宇宙の中心に「我あり」の自覚の最も原始的な意識の芽が萌え出しました。言霊ウです。宇宙の始まりです。この言霊ウの内容を表す感じを拾って見ますと
 う・生・動・蠢く等が考えられます。

言霊ウについて更に考えて見ましょう。私達は今までお話ししましたように、眼に見える外の世界から一転して、それを見て居る自分の内なる心の世界を考えてきました。そして色々な心の現象が無限に広い心の宇宙から現れ出ようとする瞬間の一点を考えることとなりました。この一点の何か分からない何かが始まる存在として言霊ウに思いが到達しました。正しく心の活動の最初の一点です。この一点を了解した心で更に思いを先に進めて見ましょう。

思いを内に向けて自らの心を顧みて広い宇宙の存在と、そこから心の活動が始まる最初の一点である言霊ウを確認しました。この事実は次のように考えることも出来ます。外界の宇宙ではなく、その外界を見ている内なる心の存在に気付きました。その心の中には種々雑多な心の現象が現われては消えて行きます。そして人はそれらの現象がそこから現われ、そこに消えていく内なる広い無限の宇宙の存在に行き当たります。そして人間の思考はもうそれより先には進むことが出来ないことに気付きました。宇宙は無限です。時間的にも空間的にも無限です。人間の心はこれより先に遡ることは出来ません。いわば人間の思考には無限という現界がある、ということが出来ます。

私達人間の心はこれ以上遡ることが出来ないのですから、引き返すことしか方法はありません。何処へ引き返したらよいでしょうか。それは無限の宇宙から、有限である心の活動が始まる一点へ引き返すことです。活動が始まる一点、それは現実的に言えば今・此所ということです。

こう考えてきますと、人間の心が活動する最初の点である無限から有限が始まるという関係性が了解することが出来ましょう。無限の宇宙を天あめといい、最初の有限を中主なかぬしといいます。今・此所である中今の自覚者（主）ということでもあります。最初に生まれた1つの存在である言霊ウに対して太安万侶が天御中主の神という神の名を当てて表したのも誠にもっともな事ではありませんか。

人間の心の活動が始まる瞬間に、心の中でどんなことが起こるかお話ししてきました。話がややもすると難しく煩雑になって恐縮なのですが、これも心の出来事として人間が意識する以前の頭脳内の作用についてのお話ですのでやむを得ない事なのだ、とご了承下さい。難解についてこの始めの瞬間である言霊ウについてももう少しお話ししたいと思います。

最初の心の活動の一点に何故言霊ウと名付けたのでしょうか。それは活動の最初の一点がどんな精神内容であるか、に合わせて五十音の中から最もふさわしい音として「ウ」を選んで名付けたのです。音声学と言う学問がありますが、それによりまずと母音のウが五十音の中で人間が発する言葉の最初の音である。といます。また人間の精神構造が全部明らかにされ、その構成要素にアイウエオ五十音の単音をそれぞれ結びつけた時、最初の原始的な意識にウの一音を当てはめると全部が合理的に整頓されることから言霊ウと名付けるのが妥当である、という事が証明されてきます。

意識の萌芽とも言える言霊ウは現実の人間生活とどんな関係があるのでしょうか、それは人間だけでなく、全ての生き物（動物・植物）の持っている最初の最も単純・直接で衝撃的・本能的な「感覚」という精神活動になって発現してきます。人間にあっては眼耳鼻舌身の五官感覚です。

「注1」 心の内容に適合した言葉を選んで名前を付けることを古語で「うら合えまかなはず」という。「うら」は裏で心の意。悲しい事をうら悲しいと言う。「合え」は合致させる意。

「ま」は真のこと。「かな」は神名で言葉のこと。

「注2」 何の現象もない宇宙が活動を開始何だか知れない何かが動き出す。古人はもの原始の意識の一点に言霊ウと名付けた。梅の木は冬まだ去りやらぬ白一色の野に、春に先駆けて生命の伊吹とも言える花を咲かせる。言霊ウの芽の意で、その花を「うめ」と名付けた。梅の語源である。「梅一輪 一輪ほどのあたたかさ」は有名な句である。

・・・その113に続く

初めにもどり

その113 島田正路氏著「古事記と言霊」より

次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神。

言霊ア・ワ：広い心の宇宙に何か動き出しました。言霊ウです。次に先天の頭脳構造に何が起きるのでしょうか。

秋か冬によく晴れた日、高いビルの屋上に上って、仰向けになって横になったことがありますか。経験のない方は想像してみてください。見に見えるものはただ一面の透き通った青い空、一点の雲もありません。その青い空を緊張せず、ただ漫然とみていると、何時の間にか空が下がってきて自分を包み込んでしまうような、または自分がだんだん空に向かって昇って行って空の中に吸い込まれてしまうような気持ちになります。誠に妙な気持ちです。それでもめげずにじっと空を見ていると、一瞬自己意識が消えて、自分が空か、空が自分か分からなくなってしまいます。

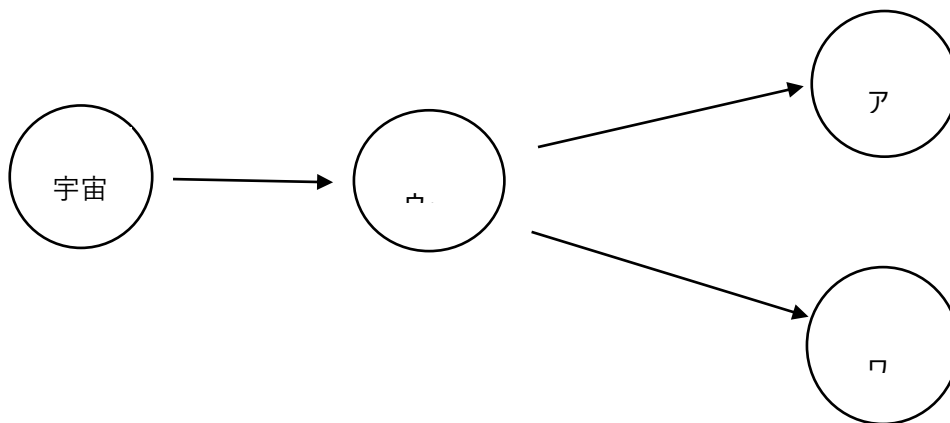
人間は相対するものを見たり聞いたりする時、自我を意識します。仰向けになって横になって一面の青空を眺めて、視点としての対象となるものを失ってしまいますと、自我意識も薄れて、ついにはなくなってしまう。

以上の事を逆に考えて見ましょう。澄んだ青一色の空をじっと見つめて、見る対象を失って自分が空か、空が自分か分からなくなりました。それは自分は空を見ているのではないけれど、見ていないのでもありません。そんな状態です。心の世界で何か見ているが、何か分からない状態、正しくそれは前にお話ししました広い心の宇宙から何か意識が生まれ、動き出した状態と同じではありませんか。言霊学はこれをウと呼んだことはすでにお話ししました。

それなら言霊ウの次に心の世界に何が起るか、もうお分かりでしょう。心の宇宙の中に一点言霊ウが生まれ、次に宇宙は主体と客体、見るものと見られるもの、私と貴方に別れる事となります。見る主体を言霊ア、見られる客体を言霊ワと言います。古事記の編纂者はそれらの言霊の意義・内容を指す指月の指として高御産巢日の神・神産巢日の神という神名を当てたのでした。

心の宇宙から言霊ウが生まれ、次に言霊アとワに分かれたと言いましても、これらはまだ意識の自覚に至る以前の先天構造の内部のことです。見て居る側が何の誰べえとか、見られる客体が何々のものとか、という具体的なものではありません。飽くまで先天の構造についてお話ししているのだ、ということをご承知ください。

この何もない宇宙から言霊ウ、アとワと分かれてくる状況を図で示しますと下のようになります。



言霊アとワについて太安万侶が高御産巢日の神・神産巢日の神という名を当てた意図は何だったのでしょうか。両方の神名を神名で書いてみましょう。タカミムスビノカミ・カミムスビノカミとなります。両方比べてみますと、漢字で書いたときは気がつかないのですが、主体を表す高御産巢日の神の方の頭にタの一字が多いという他は全く同じであること気付くでしょう。まずそのタの一字を除いたカミムスビノカミについて考えて見ましょう。

カミムスビノのカミは噛むの意です。噛み合わさる、ことです。ムスは生まれる・はえる・生じる、という意。ビは霊で言霊特に子音の事です。むして出来た子を息子（むすこ）と言います。カミムスビの全部では「噛み合わさって現象である子音を生じる」となります。噛み合わさることを現代語で感応同交して現象が生まれる、ということです。男と女が感応同交すれば子が出来ます。そのお互いに噛み合わさるもの、それは主体と客体で有り、我と汝であり、また男と女・出発点・積極と消極等々色々名事に当てはまります。

・ ・ その 1 1 4 に続く

初めにもどり

その 1 1 4 島田正路氏著「古事記と言霊」 & コトタマ学より

次に主体の方にただ一字のタの冠がついているのは何故か、を考えて見ましょう。音声学ではタ行のタチツテの音は陽性で積極的な音だと言います。剣道で刀を大上段から真っ向に振りおろす時の掛け声がタ行の音です。純粹の主体と客体が感応して現象を生み出そうとする時、イニシアチブを取るのは常に主体からであって、客体はただ受け身となるだけです。ですから主体である高御産巢日の神の方にタの字が頭についている、と説明出来ます。

それだけではありません。言霊学の講義はまだ始まったばかりですが、話が先に進みますと、人間の心の要素が全部で五十個の言霊で構成されていて、それら五十個の言霊で心の構造を表す縦五個、横十個が並ぶ五十音が出来上がります。現在私達が使っているアイウエオ五十音表もその一つです。それは自覚された人間性の内容を示しています。またその形は丁度稲を作る田んぼの形でもあります。後の話に出てきます言霊学の総結論に与えられた神様の名前である天照大御神は田をたがやしていると古事記に書かれています。タという言葉の音は田の字に通じ、それは自覚された人間性を表します。主体の側である高御産巢日の神の冠にタの一字がつく理由となります。主体と客体が感応同交するとき、主体側だけが人間性の自覚に裏打ちされた働きかけが許されており、客体側はただその働きかけに答えるだけに過ぎません。

話が少し難しくなってきたかも知れません。もう少し説明しましょう。人が何か一つの物について調べるとしましょう。その人の研究が色彩に関するものでだけである場合、その物の色が問題となり、その他の性質である固いか柔らかいか、金属製か木製か、などの問題は一切無視されるでしょう。客体は現象として主体の問いかけに答える、という事をお分かり頂けると幸いです。

何もない宇宙からある一点が動き出します。言霊ウです。この時はまだ主体と客体が割かれていません。主客未割と哲学で呼びます。そこに人間の何かの思考が加わるとき、一瞬にして「なにかあるもの」は主体と客体に分かれます。ウからア・ワに分かれます。主客未割の一者が思考が加わると主と客の二者に分かれる。この一見当たり前のように思える動きですが、人間の心の働きにとって重要な事柄なのです。始めの一者が二者に別れる事、これが人間の知性の第一の法則であり、また人間の宿命である。と言うことが出来ます。

またこのようにも言えます。宇宙から先ず一者が現われ、それが二者に分かれ、それぞれにウ・ア・ワと名が付けられました。生まれてくると同時にそれに名が付くこと、これが人間の創造の始まりです。名がつかなければ何も始まらないのと同じです。これも人間の心の営みの大原則と言うことが出来ましょう。ではこの言霊アである世界は人間の心理とどんな関わりを持つのでしょうか。言霊アから出てくる人間心理それは感情です。また主体である言霊アの内容に当たる漢字を拾って見ますと、天・吾・明などが考えられるでしょう。そして客体であるワには我・和・輪が考えられます。

そして客体である言霊ワには我・和・輪が考えられます。

「注1」 昔は「私」のことを「吾（あれ）、貴方のことを「我」（われ）と呼んだ。現代でも「お前」のことを「われ」と呼ぶ地方がある。

「注2」 宇宙から先ず一者が生まれ、それが二者に分かれる。宇宙がこの三つ分かれたということと、それが人間の知性で理解したということは同時に分けることが出来ない事柄である。そしてその事が人間の全ての始まりである。この三者、言霊ウ・ア・ワ即ち天の御中主の神、高御産巢日の神、神産巢日の神の三神を神道で造化三神と呼ぶ。中国の老子はこのことを「一、二を生じ二、三を生じ、三、万物を生ず」と説明している。

「注3」 この事を「老子」には「無名は天地のはじめ、有名は万物の母」と説いている。

この三柱の神は^{ひとりかみ}独神に成りまして^{みみ}身を隠したまひき。

独り神とは独立している神ということ。独立でありますから、それ自体だけで存在していて、他に依存しないこと、と言うわけです。どういうことか例を挙げて説明押しましょう。言霊アと言えば、そこから人間の感情がほとばしり出てくる元の宇宙です。そして人間の感情というものはそれだけで人間心理の一世界を形成していて、人間心理の他の出来事でありませ欲望とか、経験知などに依存する事なしに働きます。そのような一つの独立した心の世界（次元ともいいます）を独り神といえます。

身を隠したまひき、とは眼で見、耳で書かれるような現われた出来事（現象）ではなく、心の先天構造の中でだけの実在であるから、「身を隠している」と言うことであります。例えば「私」というものは、色々な出来事は見聞きする事は出来ますが、私自身そのものは現象として現われることがありません。それは抽象的な概念として、または宗教的な自覚の内容としては存在しているけれど、具体的に「これですよ」と人に示すことは出来ません。先天構造の内部にだけ存在して、後天的な具体性を持ったものではありません。これが「身を隠したまひき」という意味です。

「注1」 古事記の「独神」を日本書紀では「純男」と記している。「ひたをとこ」または「を

とこのかぎり」と読む。洒落た表現ではなからうか。

・ ・ その 115 に続く

初めにもどり

その 115

此所までの内容で合氣道と結びつき大きなヒントを得た箇所をピックアップして私見を記したいと思います。

母音と半母音の説明が終わりました。合氣道でとてもヒントになったのは言霊ウの発生過程です。何もない宇宙に高天原「禪宗で言う空に」に何かの兆しがおこり始めるときの心の状態として

下記の下りです。

「思いを内に向けて自らの心を顧みて広い宇宙の存在と、そこから心の活動が始まる最初の一点である言霊ウを確認しました。この事実は次のように考えることも出来ます。外界の宇宙ではなく、その外界を見ている内なる心の存在に気付きました。その心の中には種々雑多な心の現象が現われては消えて行きます。そして人はそれらの現象がそこから現われ、そこに消えていく内なる広い無限の宇宙の存在に行き当たります。そして人間の思考はもうそれより先には進むことが出来ないことに気付きました。宇宙は無限です。時間的にも空間的にも無限です。人間の心はこれより先に遡ることは出来ません。いわば人間の思考には無限という現界がある、と言うことが出来ます。

私達人間の心はこれ以上遡ることが出来ないのですから、引き返すことしか方法はありません。何処へ引き返したらよいでしょうか。それは無限の宇宙から、有限である心の活動が始まる一点へ引き返すことです。活動が始まる一点、それは現実的に言えば今・此所と言うことです。」

「人間の心が活動する最初の点である無限から有限が始まるという関係性が了解することが出来ましょう。無限の宇宙を天^{あめ}といい、最初の有限を中主^{なかぬし}といいます。今・此所である中今の自覚者（主）と言うことであります。最初に生まれた 1 つの存在である言霊ウに対して太安万侶が天御中主の神という神の名を当てて表したのも誠にもっともな事ではありませんか。」

空の宇宙の中に入るために自我意識を消す必要がありますが、合氣道の重要な心構えがこの自我意識を消すことです。下記の下り

「視点としての対象となるものを失ってしまいますと、自我意識も薄れて、ついにはなくなってしまう。」

「それは自分は空を見ているのではないけれど、見ていないのでもありません。そんな状態です。心の世界で何か見ているが、何か分からない状態、正しくそれは前にお話ししま

した広い心の宇宙から何か意識が生まれ、動き出した状態と同じではありませんか。」

逆に言いますと視点つまりものを見ている状態は、自我意識は消えないと言うこと
また自分は相手を見ているのではないけれど、見ていないのでもない、何かを見て居るが
何か分からない状態つまり判断するような見方はしていない
というヒントを頂きました。
つぎに

「人間の心が活動する最初の点である無限から有限が始まるという関係性が了解することが出来
ましょう。無限の宇宙^{あめ}を天といい、最初の有限を^{なかなし}中主といいます。今・此所である中今の自覚者
(主)と言うことであります。最初に生まれた1つの存在である言靈ウに対して太安万侶が天御
中主の神という神の名を当てて表したのも誠にもっともな事ではありませんか。」

「何もない宇宙からある一点が動き出します。言靈ウです。この時はまだ主体と客体が割かれて
いません。主客未割と哲学で呼びます。そこに人間の何かの思考が加わるとき、一瞬にして「なにか
あるもの」は主体と客体に分かれます。ウからア・ワに分かれます。主客未割の一者が思考が加わる
と主と客の二者に分かれる。この一見当たり前のように思える動きですが、人間の心の働きにとっ
て重要な事柄なのです。始めの一者が二者に別れる事、これが人間の知性の第一の法則であり、ま
た人間の宿命である。と言うことが出来ます。」

このフレーズ主体と客体に分かれる前というのは言靈ウとして一つです。一つと言うことは
自分が動けば全て動く「天上天下唯我独尊」我一人舞えば天地舞う状態です。この状態
の時何かの思考が加わると主と客の二者に分かれてします。一つが二つになると云うこと、
舞っているときは思考を働かしては駄目と言うこと
次に下記のフレーズ

「純粹の主体と客体が感応して現象を生み出そうとする時、イニシアチブを取るのは常に主体から
であって、客体はただ受け身となるだけです。」

「主体と客体が感応同交するとき、主体側だけが人間性の自覚に裏打ちされた働きかけが許されて
おり、客体側はただその働きかけに答えるだけに過ぎません。」

主体と客体が感応して、合氣道的に言うなら相手を受け入れて、現象を生み出そうとする
時、つまり導こうとするときイニシアチブを取るのは主体からであって客体はただ受け身
となるだけ、つまり相手を受け入れた側が主体で、その主体がイニシアチブを取ると言う
こと

主体と客体が感応同交するとき、つまり主体が客体を受け入れたとき、主体側だけが人
間性の自覚に裏打ちされた働きかけが許されておりとは、人間性の自覚とはその人の次元

のことを指す。つまりどの次元に住んでいるかによって客体を導けるかどうかが決まる。つまり心の次元の大きさは言霊ウ→オ→アと変化する。ここではアの心はウとオを含んでいる状態、アの人だけがウとオを導ける勿論アも含む。逆に主体がウならオもアも導けない事になる。言霊アとは愛と慈悲の世界、つまり植芝さんは偉大なる神の心を己の心にする事を説いた。それを合氣道と名付けた。つまり言霊ウの心では合氣道の技は習得できないこと納得いきます。

・・・その116に続く

初めにもどり

その116 田正路氏著「古事記と言霊」

次に国くに稚わかく、浮かべるあぶら脂あぶらの如くして、水母くらげなす漂える時に、葦芽あしかびのごと萌え騰もあがる物よに困りて成りませる神の名は、宇摩志うまし阿斯訶備比古遲あしかびひこぢの神。次に天あめの常立とこたちの神。この二柱かみの神もみなひとりかみ独みみ神かみに成りまして、身を隠したまひき。

国くに稚わかく、浮かべるあぶら脂あぶらの如くして、水母くらげなす漂える時に

心の先天構造の中に初めて生まれてくるウアワの三つの言霊の宇宙が確認できました。次に宇宙はどう分かれてくるのでしょうか。話を先に進める事にしましょう。「国稚く」の国とは組んで似せる、または区切って似せる、の意。分かったものに名を付ける、ということは、広い宇宙の一部を区切って他と区別して言葉としてそのものの内容を表現することです。現代使われている国という言葉も、世界の中から日本という国を区別して付けた名前、ということが出来ます。何もない宇宙からウアワの三つの宇宙が分かれてきて、それに名が付いたけれど、まだそれだけでは心の宇宙の区分けは始まったばかりで、はっきりとしていない。そのことを「稚わかい」と表現しました。「浮かべる

脂あぶらの如くして」とはその状態は水の上に漂っている脂のように不安定であって、の意。「水母くらげなす漂へる時に」の水母くらげは暗気くらげの意、混沌として暗黒に包まれていて、まだはっきりと区別が出来ない、と云うことです。心の宇宙に意識の芽が生まれ、それが主体と客体に分かれた、というだけでは整理確認の作業は混沌としている、ということでもあります。

「葦芽あしかびのごと」とは葦の芽の如く、の意。「萌え騰もあがる物よに困りて」とは、葦の芽が次から次へと連鎖反応を起こすように吹き出てくる様子に喩えている。では何が出てくるか、といえば・・・

うましあしかびひこぢかみ あめとこたちかみ
 宇摩志阿斯訶備比古遲の神。次に天の常立の神。

言霊ヲ・オ：宇摩志は靈妙な意。阿斯訶備比古遲の阿斯訶備は葦の芽、比古遲とは男の事。男は音の子で言葉を意味する。全部で靈妙な葦の芽の様に次から次へと吹き出るように現われるもの、たとえば、それはすぐに人間の記憶、経験した出来事の記憶のことであります。その記憶はただ一つぽつんとあるものではなく、他の記憶と連結していて、次々と果てしなく関係が広がります。その経験の記憶が存在する宇宙のことを言霊ヲといいます。そのヲに漢字を当てはめると尾・緒などが考えられるであります。

記憶の連鎖のことを命の玉の緒などと呼びます。この緒が途切れてしまうのが人間のボケです。また記憶というのは、経験そのものは過去になっていても、いつまでも尾を引いて残ります。それは動物の尾のようなもので、窓の前を動物は過ぎ行っても、尾っぽが一番最後まで残るようなものです。

天の常立の神とは大自然（あめ）が恒常に（常に）成立する（立）主体、といった意味であります。阿斯訶備比古遲が記憶そのものの世界（言霊ヲ）とすれば、天の常立の神とは記憶し、その記憶それぞれの関連を考える主体の世界（言霊オ）と言うことが出来ましょう。記憶とその関連を考える世界といえば、そこからやがては学問が成立してくる世界であります。それはまた「自然界とは何か」の思考を成立させる心の世界のことであります。

以上の記憶とか学問的な思考を成立させる宇宙も、それだけで充分独立していて他に頼ることなく存在する世界です。またそれは先天構造の中の存在であって、それ自体は現象となって姿を現わす事は決してありません。ですからこの言霊オ・ヲも「独神になりまして、身を隠したまひき」なのであります。

・ ・ その 117 に続く

初めにもどり

その 117 島田正路氏著「古事記と言霊」&コトタマ学より

次に成りませる神の名は、^{くに}国の常立^{かみ}の神。次に^{とよくもの}豊雲野の神。この神も^{ひとりかみ}独神に成りまして、

^{みみ}身を隠したまひき

言霊エ・エ：国の常立の神とは（国）が恒常に（常）成立する（立）ための実体（神）という意味であります。この実体が言霊エです。この宇宙の広がりから現れて来る人間の働きは実践智です。言霊エに漢字を当てはめると選の字が最も適当でしょう。言霊エに「選ぶ」を当てるのが何故いか、もう少し詳しく説明する事にしましょう。

広く何も無い宇宙に意識の芽とも言われる言霊ウが生まれます。まだ主客未剖半で、何かあるがそれが何であるか分からない状態です。言霊ウは五官感覚作用が現われて来る世界です。次にその何だか分からないものに人間の「何かな」という思考が加わった瞬間、言霊ウの宇宙は分かれて主体（吾）と客体（汝）である言霊アとワの宇宙となります。言霊アの宇宙から現われる人間性能は感情です。「何かな」の思考の次に、人はそれを今までに経験した過去の出来事の中に求めようとします。記憶と結びつけようとします。言霊オとヲの経験知が生まれます。そしてその何かが分かたら、人間は次にそれをどう扱うか、の洗濯に迫られます。言霊エとエが現われます。言霊エ（エ）とは人間の選択する即ち実践智が現われてくる宇宙のことなのです。言霊エに「選ぶ」の字が適当だ、とお話ししました理由です。

とよくもの豊雲野の神の「豊」は十四の下図を示す謎です。解説は後章にゆずりますが、十四は先天構造を構成している言霊の基本数なのです。とよ あしはら みずほ くに 豊の葦原の瑞穂の国の豊も同じ意味であります。「雲」は組むという言葉を示す謎です。「野」は分野という程の意。豊雲野の神で先天構造の言霊をどのように組んで行くか、を考える分野の実体と言った意味にとれます。それは実践智によって表された道理とか道徳とかという意味となりましょう。言霊エに当たる漢字を拾いますと慧、絵等が考えられます。

ここまでの話で、何も無い広い宇宙からウ、アワ、オヲ、エエの宇宙が分かれ生まれてくることが確認されました。言霊ウから五官感覚作用が、言霊ア（ワ）からは感情が、言霊オ（ヲ）から経験知が、言霊エ（エ）からは実践智が現れて来るそれぞれの独立した宇宙で有り、その一つ一つは先天構造内部のもので、それ自体は現象として姿を現わす事がない実体であることが分かりました。そして母音で表します言霊アオエが主体側であり、半母音言霊ワヲエが客体側であることも分かりました。

先に、宇宙が意識の芽とも言える一点言霊ウが生まれ、そこに何かの思考が加わると主体と客体言霊アとワに分かれること、それが心の働きの第一の法則で有り、また人間の宿命とも言えるものだ、ということをお話ししました。更に今、言霊オの経験知と言霊エの実践智の区別とのあいだには密接な関係があり、今後幾度となく解説することとなりましょうが、今は簡単に説明することといたします。

現代人は知恵というと主として学問的知識の事を思い浮かべ、物事に処する「機転」という実践智の方を見落としがちです。または知恵といえば両者を混同して思いがちです。けれど両者は全く次元も成り立ちも違う別ものなのです。

ではどのように違うのでしょうか。



ある物事を見て、見る主体とみられる客体が分かれたところから思考が始まる時、言いかえますと、ある出来事を見て、それを頭の中に思い浮かべて、「これは何故かな」と思考が始まる時、学問的な知恵、言霊オの世界から働きが現われます。

これとは別に、「何、何故」の思考を傍らに置いて、思考の始めである宇宙の初発に帰り、「さて私はどうしようかな」と思うとき、実践智である言霊エからの知恵が働き出す、という事になります。詳しい説明は後に譲ることにしましょう。

「注1」 豊雲野神を日本書紀では「豊斟^{とよくみぬのみこと}傍尊、豊組^{とよくみのみこと}野尊、豊香節^{とよかふしぬのみこと}野尊、浮経^{うきふぬ}野豊買^{とよかひのみこと}尊、

葉子^は国^こ野^こ尊^{にぬのみこと}」などと書いている。浮経^{うきふぬ}野とは浮船の謎。葉子国とは箱国の意。私から貴方に心を渡す言葉を船に喩える。また言霊五十音図は方形のため箱と呼ぶことがある。日本書紀の種々の神名の内容は非常に興味深いものがある。

「注2」 言霊才から現われる経験知の構造を図示すると△三角形であ現わす事が出来る。正反合の弁証法的思考と哲学では呼ぶ。△は形而上学、▽は形而下学、あわせて籠目のマークで示す。西洋的思考法の代表形である。

「注3」 言霊エから現われる知恵の基本形は□四角形である。田   で表されている。

東洋的思考の代表形である。

・ ・ その 118 に続く